

兒童の音樂教育に就て

東京音樂學校講師 草 川 宣 雄

あるお母さんが「私は何年も何年も音樂の勉強をしたけれど、これと云つて何にも覺えては居ない、おまけに折角ならつたピアノも今は何一つひけやしない、いつそピアノを賣つてしまひたいと思ひます」とこぼすと、それを聞いて居た神經質の奥様が「子供が歌を歌つたり、ピアノをひいたり、うるさくてたまりません」と合槌をうつつた。

さうかと思ふと「私のちひさい時には、音樂など誰も教へては呉れませんでした。私の代になつたら、是非子供には音樂をならはせたいと思ひます」と云つた奥様もある。或立派な地位にある方の奥様で、「女の兒には音樂をならはせなければならぬが、男の兒には音樂をならはせる必要はない、何かもつと外の大切なことをならはせませう」と云つて、男の兒には音樂の勉強をさせなかつた。此の男の兒が段々火くなつて、高等學校の生徒になつた頃、お酒が好きになり、お酒を呑めば呑む程面白く歌へる俗曲が大好きになり、遂に音樂趣味は低級から低級へと墮落し、遂に救ふべからざる罪の淵に沈淪してしまつた。この痛ましい經驗に泣き暮した奥様は、二男こそは兄の徹をふませまいと、漸く指が動くか動かないかの幼い子供の時から、せつせと猛烈にピアノの練習をさせたと云ふ事實も知つて居る。

或る親御さんは、これと云ふ定見もなく、子供が習ひたいと云ふので音樂をさせる。或人は生活のたしにもと音樂をさせる。音樂を勉強させれば、つまらない遊をしないからと思つて居られる親御さんもある。少し進んだ御考の方でも、藝術趣味を進めてやる事が出来るかと考へられる位が一番よい處である。音樂を學ぶのは家庭や朋友との交際を助けると考へる人もあれば、唱歌をすると身體が丈夫になると考へる人もある。

又は娘に音楽を學ばせると社會に出ることが出來、よい結婚の相手を選べると考へて居るお目出度い方もあるかも知れない。

音楽を勉強するわけは、自分自身の奏する音楽を喜び、或は他人の奏する音楽そのものゝ中に我を没入させる爲である。ほんとの音楽の鑑賞とは、音楽に感じ、音楽を賞美することである。

音楽そのものを聴くことを喜んで音楽會に行き、上品な音楽を樂しみ、精神に調和を與へられる様にと希望し、他人を愛することを學び、眞の幸をその中に見出すことの出來る様にと兒童を導くことが大切である。

ハルレ大學の音楽學の教授、アーノルド・シェリング博士は、「音楽教育は音楽的作品的時代と、其の形式を明にして、作曲者の意味を汲むことを得しめ、且つ其の作品の眞價を判斷することが出來る様にしてやることである」と云つて居る。又ジュネーヴの音楽學校の和聲學其他の音楽科學の教授であり、また作曲家であり、現今はリトミックで有名なダルクローズ氏は、音楽教育を説明して、「生徒の頭腦と共に其の心情を教育し、音楽を理解すると共に、これを熱愛することが出來る様に、其の美的感情を發達せしめねばならぬ。子供等に音楽に感ずることを得しめるのみならず、音楽に吸ひ込まれる様に、そして身體も心も悉く音楽に捧げてしまうことが出來る様にしてやらねばならぬ。たゞに子供等の耳を以て音楽を聴くに止まらず、其の全身全靈を以て聴く様に教育せねばならぬ」と説いて居る。

いつ頃から音楽を始めるがよいか

次に大切な問題は、兒童はいつ頃から音楽を始めるがよいかと云ふ事である。

一般に、子供は健全である限り、音楽を聴くこと、聲を出して歌ふことが好きである。一しよに歌ひ、一しよに踊ることが出來る音楽、云ひ換へればリズム的音楽は彼等の最も喜ぶものである。兒童の生活表現の様式を見ると、血液の循環

と同様にリズム的であることがわかる。走ること、運動すること、語ること、歌ふこと、すべてがリズム的に行はれて居ることが知られる。即ちリズムは彼等の内に生き、運動を起し、經驗を表現させ、演奏に模倣にと走らせるものである。

兒童の唱歌は出来る丈け早くから始めるがよい。ジャン・ジャック・ルツォーは、人間の教育は誕生に始まると云ひ、フエネロンは、最初の習慣は最も強いものであると云つて居る。妙な様子で歩くこと、妙な發音で歌ふことは、何より最つ先きに訂正してやらねばならぬ二つの大切な事である。

音楽家グノーの「藝術家の思ひ出」と云ふ著書に、「私をお子守するお母さんは、牛乳をのませる様に音楽を吞ませて下さいました。彼女は音楽なくては私を育てることが出来ませんでした。そして音楽を學ぶ事は、面倒くさいとか六かしいものだとかと云ふ様なことを思はせない様に、自然に教へて下さいました。かくして遂に音の出し方、音程の歌ひ方がわかる様になり、長調と短調との區別がつく様になつた。或日のこと、乞食らしいものが歌を歌ひながら街を歩いて居るのを見ました。その歌は短旋法の曲であつたので、お母さん、なぜあの人は歌を歌ひながら泣くのですか、とたづねたものだ」と記されて居る。前にも述べた如く、唱歌はリズム的言葉の發表の媒介者である。兒童は唱歌によらねば、如何なる感情をも發表することが出来ない。兒童に印象を與へ刺激を與へるもので、唱歌位強いものはない。又唱歌は美についての親しい經驗、美を創造する力の意識を與へる。即ち兒童に、その心と身體と感情を包む美の體驗と喜悅を與へ、他人の作曲を歌ふに止まらず、彼等自身で作曲を試みる處の、美を創造する力を與へるものが唱歌であり音楽である。

唱歌を學ぶことが早ければ早い程、後年に於て彼等を喜ばせる處の聲音の自由を建設し、且つその身心を、廣い自由の天地に解放させ、飛翔させることが出来る。また唱歌を學ぶことが早ければ早い程、聲の精巧さ、耳の鋭敏さ、よい音楽に耳そばたてるよい習慣を、早く建設することが出来る。

兒童の聽音能力の發達

初生兒に於けるオイスタキー氏管、及びこれと直接關係ある諸腔は、胎兒時代と同様、水を以て充たされて居るので、空氣が入りこむ事が出来ない状態にある。即ち初生兒は、其の初期に於ては通例聾である。然らばいつ頃から耳が聞える様になるかは甚だ不明である。蓋し、いつ頃から聞えるかと云ふ事は、初生兒の耳の近くで音を鳴らし、初生兒がこれに對してどんな態度を示すか、その四肢の動かし方などから判断するのである。

まだ四週間目位では、耳の傍で相當大きな音がしても、一向感じないらしいので、まだく聾の状態にあることがわかる。偶々、音のする方へ顔を向ける様に見える事もあるが、これは反射的に行はれるもので、決して意識的に行はれるものではない。しかし三ヶ月目、若くは四ヶ月目になると、音がどつちの方向から來るかと言ふことが、はつきりとわかり音のする方に顔をむけたり、身體をむけたりするので、音を正確に聽く力があることがわかる。

初生兒に於ては、聽覺の方が視覺よりも早く發達するものであることは、初生兒が未だ母親の顔を見ることが充分出來ない中に、母親の聲が聞えるので、その欲望を母親に訴へ様として、いかに哀れつばい聲を出して泣くことの事實からもよくわかる。コンペーレも、その「兒童精神の發達」に於て、「兒童の美感は、音樂のみの根原的偏愛の形式に於てあらはれ、他の如何なる感情よりも早く發達するものである」と説いて居る。

又クルト・ヴァルターの實驗によれば、赤兒は六十七日目には母の聲を充分に聞きわけることが出來ると、彼の著「兒童の肉體的精神的發達」に記されてある。

兒童は決して耳にした音を、即座に眞似することをしない。先づ音のする方に向き、目の助けによつてお話や唱歌の聲の出る口を見つめる。かくして次第々々に口形と發音とを結びつけるものである。

兒童は刺激の許容によつて音性質を明に區別し得る力がある。鈴の音やトライアングルの音を好むものもあり、ピアノの音を好むものもあり、歌の聲を好きなものもある。しかし兒童は決して大きな聲、荒々しい音を好まぬのみならず、非常にこれを忌むものである。

ペルリン音楽學校の副校長であるシュエネマン氏の語る處によれば、三年七ヶ月兒童が、お父さんの大きな聲でタンノイザーを歌ふのを聞いて、素晴らしい不興氣な面持で、「パパの聲は馬方見たいですねー」と云つたと記され、更に此兒童はチタラの音や、殊に母親や姉妹達の唱歌の聲が好きであると記されて居るが、此れが大體の兒童に通有な聽音上の性質である。

兒童の模唱には、意識的に發達するものと、無意識的によるものがある。四才頃になると、音色、噪音、樂音、リズム等を注意する様になり、これと共に兒童の發聲諸機關が發達し、相當なよい模唱が出来る様になり、日に／＼色々な音リズム、歌等が耳の外で鳴り響くのがわかる。兒童等はこれを聞いて踊り出したり、聲を用ひて模唱する様になる。かくして彼等は自分で唱歌を練習し、改良し、反覆する様になる。しかし噪音及樂音の數々は、無意識的に彼等の迎へる處となり、大人も氣付かない様な様々な言葉、話し振り、旋律、噪音、樂音などが、兒童に大なる印象を與へて居ることが知られる。

此處に於て音樂の教育にあたるもの、兒童の教育に任ずるもの、注意せねばならぬ大切な問題は、兒童の環境の整理、即ち兒童の身邊から不良な音樂を驅逐すること、其の幼時より常に純粹にして良好な音樂を聽かせることである。

大教育家ベスタロツチは、その教育説の一つとして社會生活の必要を説き、特に家庭生活を重んじ、母性愛を教育の根本原理として居る。彼は云ふ、「母の居間には音樂が響かねばならぬ、特に母は其の取扱ふ音樂が神聖なものであるか否かを識別する力を持つて居なければならぬ」と説いて居る。彼の名著「リンハルトとゲルトロッド」の中に、「ある土曜日の

夕方、マウラー・リンハルトが家に歸ると、子供等はさつぱりした身形で、お父さんを待つて居る處であつた。母親は仕事の合間々に、子供等がすっかり覺えてしまふまで、少しのあきた様子もなく、休息もせず、本も見ずに一つの歌をせつせと子供等に教へて居た。父親がはいつて來た時、子供等は母親といつしよに歌ひとつつけて居た。母親と子供とが餘り晴れやかに心安らかに歌つて聽かせてくれるので、リンハルトは眼に涙をたくえて、天國に住むおまへ方には、憂さもつらさも消えて行つて仕舞ふだらうと云つたと記され、更に、家庭に聞える安らかな樂しさは、詩人も到底よく書き記す術を知らない事であらうとペスタロツチはつけたして居る。

話はよい音楽を聽かせねばならぬと云ふことに歸つて、子守唄等は此の目的を達するには良いものであると云はれて居る。但し男兒は子守唄を好かないとエルヴィン・ヴァルカーは其の著「音樂的體驗の發展」に述べて居る。

また幼稚園では家庭と協力して、六才迄はマーチやスキツピングによつて規則正しい拍子の觀念を持たせる様仕向け、また兒童の一般的に創作的、受容的能力をも發揮させることが大切である。

歌を歌ふ練習

次に大切な練習は旋律即ち節を歌ふ練習である、兒童は鳥と同じ様に他人の歌を模倣して歌ふものである。

自然は兒童に模倣性を賦與してくれた。大概の子供は大きい音には氣をとられるが、音の性質や色々な音色を區別することが出来ないものである。それ故兒童には音に耳を傾けることを學ばせなければならぬ。音に耳傾けさせるには先づ耳に聞えた音を模倣し、柔い咽喉でこれを歌ひ出すことを學ばせねばならぬ。それ故兒童に模倣させる教授者、指導者の歌は模範的な美しい良いものでなければならぬことは説明を要さない。やゝもすれば五線譜表上にはされぬ音符によつて、兒童に正しい唱歌を學ばせ様とするものがあるが、これは兒童の唱歌の心理を無視した指導法で、かへつて兒童に

唱歌を嫌悪せしめる基となるものである。

記號を考へるに先だつて物を教へねばならぬ、知識を與へる前に輕験させなければならぬとヘルバルト・スペンサーが云つた様に、樂譜を見せる前に先づ歌つて聞かせ、且つこれを模唱させねばならぬ。

兒童の即興曲

次に大切な問題は兒童の即興曲の事である。兒童はなんでも歌にして仕舞ふ面白い性質がある。お人形さんをだいては自作の子守歌を歌つて聞かせる。鐵砲を持つと自作の軍歌を歌ふ。ひとりぼつちの時は口を噤んで進行曲風なものを歌ふこれが兒童の即興曲の端緒である。兒童は創作的のものである。即興作曲は教授案上の要求ではなく、教授に於ける兒童の性質よりの要求である。

即興曲とはどんなものかと云へば、「お早う御座います」から始めて、兒童の心にある氣持や欲求を、普通のお話よりも少しく際立つた調子、即ち唱歌の節らしいもので發表させることである。

兒童の作曲の仕方を見ると、決して音樂大家のする様な方法ではなくて、瞬く間に、今迄學んだ歌、覚えて居る節、練習した歌や曲から集めた歌を作り、これを歌ふと云ふやり方である。

ウイリアム・ジェームスは、其の著「教師に告ぐ」に於て、今迄の音樂教育に於ては、兒童の藝術的成長の偉大さについては何等の注意を拂はなかつたが、將來の音樂教育は兒童の中にある創造力の開拓を目的とするものがある。兒童の幼時に於ては、物質についての感覺的財産に最も少くの興味を持つて居るものである。

即ち構成、組立は彼等の中に働く最も力強い本能である。

文學と音樂に對しては、大概の兒童は根本的の發明の力を多分に持つて居る。そして若し若干の經驗を積んだ時には、

